

書 評

川端康雄著『ウィリアム・モリスの遺したもの
——デザイン・社会主義・手しごと・文学』
(岩波書店、2016)



中島 俊郎

芥川龍之介の卒業論文が「詩人モリス」であったことはよく知られている。構想された当初の「モリス一人とその芸術」という壮大なテーマが、次第に縮小していき、最後には「幼少時代のモリス」になってしまうのではないかと学友たちが嘲笑したという逸話が残っている。だが、本書に謳われている「デザイン (designs)、社会主義 (socialism)、手しごと (craftsmanship)、文学 (romance)」という長いサブタイトルを見れば、誰しも芥川の縮小ぶりを笑えまい。モリスはまったく相容れない領域を軽々と横断し、それらどの分野においても一家をなす業績をのこした。死後一世紀、影響力がいずれの分野においても顕著に刻まれ、いささかも衰えていない実態をかんがみると、「歴史が追いつけない人間」とE. P. トムソンがいみじくもモリスを評した言葉を首肯せざるをえない。だが同時にモリス研究者はとてつもない力業を研究に強いられるわけである。

本書はこうしたヴィクトリア朝の巨人に立ち向かった果敢な知的冒険である。『ウィリアム・モリスの遺したもの』とは、じつに魅力的なタイトルである。「遺されたもの」をいかに研究し活用していくかが文化研究者の任務なのだから。

第一部「タペストリーの詩人」には、詩人、工芸人、デザイナー、そして社会主義の実践者としてのモリスの多彩な活動が多角・多層的な視座から検討されていく。「タペストリーの詩人」と冠された章が第一部全体を要約しているようだ。詩人モリスにおける「タペストリーの詩人」という、平板で単調な長編詩人でしかないというG. ハウの否定的な詩人像から、イエイツ、C. S. ルイスたちによる肯定的な評価への転換を丁寧にたどる第6章

は、詩人モリスの再評価のみならず、新しいモリス詩、ロマンスの読み方を喚起している。抽象という袋小路に這入りこんだモダニズム詩をその陥穽から解き放つ力をもモリスの詩、ロマンスは包摂しているという指摘はじつに瑞々しい。著者が引用している「[モリス]の想像世界は、スコットやホメロスのそれのように、風が吹き、手で触れることができ、響きを発し、立体的である」というルイスの評語は、その意味で示唆的である。『イーリアス』、『オデュッセイア』などのホメロスの英雄叙事詩を継ぐ伝統のなかに『イアソンの生と死』、『地上樂園』を並置してみると、逆に「新しい読みの可能性」が開けてくると思えるからである。よって「タペストリーの詩人」とは、工匠と詩作がみごとに一体化したモリスという存在を適切にとらえた評言であるといえよう。

そして、この評語はケルムスコット・プレスを起した書籍工芸家モリスについても当てはまる。タペストリーの織り方を学んだとき同様、紙、インク、ボードの製法、字体デザインから活字の鑄造法、そして印刷・造本法までモリスは自らの手でやりとげた。ヴィクトリア朝に流布していた「ニュー・スタイル」字体をあえて退け、作品の内容に統一をあたえるべく自ら考案した字体を創りだした。用と美を一体化することこそ、「タペストリーの詩人」の本懐であったのだ。

さて、第一部の雄編は、なんと言ってもモリスとE. B. バックスの関係を論じた「奇妙な二人組」であろう。私の知っていたバックスは、ドイツ哲学の翻訳者としてであった。ショーペンハウエルの翻訳 (*Selected Essays of Arthur Schopenhauer*, 1891) とともに、カントの英訳 (*Kant's Prolegomena and Metaphysical Foundations of Natural Science*, 1883) は、英語圏へのカント哲学の定着に大きく寄与した。そしてヴィクトリア朝の人々とマルクスとの交わりを描いたジョン・カウリーの好著 (*The Victorian Encounter with Marx*, 1992) を読み、ある程度まで予備知識があったとはいえ、本論により『社会主義』(1893) が難産の末、両者の「協働」により出版された過程が詳らかになり、蒙をひらかれた。類似点以上に相違点の方が大きく、かつまた深い両者であったが、バックスのモリスに対する正鵠を射た指摘(ピューリタン主義への憎悪、禁欲的狂信の否定、人生に対する寛大さなど)を顧みると、この人ここに在り、というような上質な評伝の一節を読んでいる

かのである。

この第5章では『社会主義』の本造りに紙幅をさき、モリスのレイアウトなどが詳しく紹介されているが、ある読者にとってはまったくの脱線とこの部分が感じられるかもしれない。だが、それは誤りである、というよりもっとも重要な一節と考えるべきである。モリスの芸術原理ともいえるべき根本思想が開陳されているからである。芸術と政治が不可分であるという、モリスの基本姿勢がまさにここにあるといえよう。

続く第二部では「日本への波動」というテーマのもと、モリスとかわりのあった先人たちの業績が正確に測定される。まず、1934(昭和9)年に催されたモリス生誕百年祭を中心となって開催に導いた大槻憲二の謎にみちた動向が明らかにされる。精神分析の分野へ進み、モリス研究と断絶したと思われていた大槻がモリスを自己の生涯を切り拓く師と仰ぎ、研鑽をつんでいた事実を明らかにしていく。「人と仕事」を基軸として研究対象をみようとする著者の視線は、御木本隆三とラスキン協会の関係にそそがれ、今日、ランカスター大学のラスキン・リサーチ・センターで「ミキモト・レクチャー」と冠されている当人の栄光と悲慘を余すことなく伝えてくれる。そして宮澤賢治が称揚した「第三芸術」にモリスの「レッサー・アーツ」を認め(「個性のすぐれる方面に於いて各々やむなき表現をなせ／然もめいめいそのときどきの芸術家である」)、かつまた羅須地人協会の理念と活動がモリスの提唱する「アーツ・アンド・クラフツ運動」と通底していることをも指摘する。

モリスと柳宗悦の関係は、民藝運動が提唱した用と美という実践のなかで、自明のものと考えられているが、著者はこうした「定説」に対して疑義を発する——「柳のレッド・ハウス批判は妥当であるのか」、と。柳の誤謬を正す見解は着実に乱れない。そして最後に、著者の師である小野二郎を「社会主義者モリスと装飾デザイナー・モリスを総合的にとらえ」た先駆者としてみなし、そうした研究を可能にせしめたのは「アクチュアルな批評精神」であると結論づけている。もし、研究の上で持続というものがあるとするならば、師と著者を結びつけているのは、この精神性にほかならないであろう。そして師のモリス研究を、「小野は、トムソンが見たモリスの政治思想上の発展過程がモリスの装飾芸術作品の発展の道筋と照応

することを、作品の細部に踏み入ることによって実証することをもくろんだ」(P. 253)と著者は認定しているが、まさにこの研究態度の延長上に本書があることを考えれば、研究の「照応」を認めることができるのではあるまいか。

そして第三部は「ヴィクトリア朝と現代」という題目のもと、三篇の書評——テューコルスキー『審美眼』、マッカーシー『バーン＝ジョーンズ伝』、『アナーキーと美』——と、一篇の解説——ラスキン『ゴシックの本質』——からなる。ただ、これら三篇をたんなる関連本の書評を集成したという読み方は早計である。

第13章の「ヴィクトリアン・モダニズム」では「ヴィクトリア朝初期から二十世紀初めにかけての英国の視覚芸術にかかわる言説」が論じられているが、たとえばR. フライのオメガ工房とモリスのアーツ・アンド・クラフツ運動を関連づけるがごとく、本書の第一部、第二部で論じられてきた対象、事象を、第三部で提議されている諸問題と結び合わせて考えることこそ読者の務めとなってくる。受身になりがちな読者に積極的な参画を誘う本書の構成は、知的好奇心をうながし、問題の在り処を鮮明にしてくれ、まことに心にくい。読みのベクトルは、未来のみならず過去へも向う。「ヴェネツィアの石の重み」は、ラスキンの『ヴェネツィアの石』第二巻第六章で追究された「ゴシックの本質」を論じた一文だが、何ゆえにゴシック性がモリスの中心テーマとなりえたのかという点が鮮やかに指摘される。つまり「政治的なラディカリズム」こそ、ラスキン、モリスを結ぶ靱帯である、と教えてくれる。

最後に著者にみられる真摯な研究態度を指摘しておきたい。通例、研究者は書きためた諸論文をあつめて単行本化し世に成果を問う。多くの研究者は放置していた論文を無造作に収録し、本にしてしまう。本書の著者は大いに異なっている。所収論文「大槻憲二とモリス誕生百年祭」の初出は、本書より十年以上まえに出版された『アーツ・アンド・クラフツと日本』(2004)である。最初、掲載された論文には23の注がついていた。それが本書においては注が35まで増加している。むろん注の数が増えたという単純な問題ではない。内容において大幅な加筆訂正が行われた証しなのである。モリス誕生百年を顕彰する展覧会を紹介する記述は、展覧会の閉会

でもって終わるのが常である。論文の初出時はそうした結論であったが、追補された本論分では展覧会以後も大槻が英国の研究者たちとモリスについて書簡を交わし研究を続行してきた動向が詳述されている。精神分析研究に立ち向った大槻がモリス研究を放棄したのではなく、一生、営々として研究を続行していた姿があぶり出される。著者はここにあるべき研究者を見出し、共感したのではあるまいか。

[追記。バックスの著作データーの誤記 (p. 82) を訂正しておきたい。『社会主義の宗教』は1886年、『社会主義の倫理』は1889年に出版されている。注(21)のデーターが正しい。また ‘explication de texte’ の訳語は「文学テキストの説明」(p. 254) よりも「文学テキストの精読」の方が内実をよりよく伝えるのではないか。]

——甲南大学教授